

戮力協心

中部中・1 大瀧 依春

部活体験、先輩方の作る音色ひとつひとつに心惹かれ、即入部を決意した。

自分にあんなに綺麗な音が出せるか、そもそもやりたい楽器パートに入れるか。仮入部希望調査の紙を目の前にして考える。けれどそんな不安より、やってみたい。吹いてみたい。という好奇心の方が強くて、記入の欄に「吹奏楽部」と記入した。

私があこがれたのは「クラリネット」。低音や打楽器に支えられながら、力強く、それでいて綺麗な音をしていて、何より、吹いている先輩自身が楽しそうだった、という理由もある。あんな風に楽しく吹けたら。そう思っていたけれど、現実には実力が全て。

楽器がクラリネットに決まってから約一か月ほどたった頃、先生の指示でひとりずつ打楽器をたたき、二か月後の夏のコンクールに打楽器として手伝える人を選ぶ、というものがあった。私はそれに選ばれた。初めは選ばれて、自分が認められたみたいでうれしい、なんて思っていたけれど、その反面クラリネットの方の練習が少なくなってしまいうことも、なんとなく感じていた。それが嫌だった。一番したいことに一番時間を使えないこと、他の子と差がついてしまうこと。それだからか、私が手伝いとして合奏に参加するまでの、先生がくれた一週間の練習期間は、期間の半分ほどの日にちしか練習する気になれなかった。

そして迎えてしまった合奏当日、先輩方は同じパートの人たちとリズムを合わせていたり、何人かで集まって軽く合わせて吹いてみたり。余計なことなんて何も話していなかった。さつきまで、「今日一緒に弁当食べよう」なんて明るく話しかけてくれた、同じ打楽

器のお手伝いの子も、楽譜に書き込みをしたり、黙々と自主練習していて、急に顔の部分に一気に熱が集まってきた。恥ずかしい、消えたい、不甲斐ない！様々な言葉が頭のなかをぐるぐると回っているように感じた。

トントン、と、指揮者でもある先生が、使っている木製の指揮棒で机を軽く叩いた。そうすると皆、音を鳴らした先生の方を向いた。そして先生の口から一言、「合わせます」。

始めは何か喰らいついていたものの、途中から何が何なのか、今どこなのか、私は何をすべきか分からなくなって、楽譜の色々とところに目を走らせていたら、もう曲は終わってしまった。先生が各パートの修正点を伝えて、再び自主練習へもどった。途端、先生が近づいてくるのを視界の端でとらえた。どうしよう、絶対に間違えていた、だからこっちへ向かってきているんだ。嫌な汗が顔をつたう。気まづくなつて楽譜を見る。手が動かない。心臓の音がうるさい。そう、ぐるぐる考えていると先生から名前を呼ばれる。いつのまにか隣まで来ていて、心配そうな顔でこっちを向いた。反射的にはい、と返事をする。すると、「どこが分からない？」と楽譜を覗き込んで言った。驚いて固まっている私を再度先生が心配そうに見る。目が合ってどきりとして、とっさに「全部です」と返し、テンポも拍も、装飾音もです。と付け足して言った。思っていたよりも声が震えてしまつて、そんな私をなぐさめるように「人間誰しも初めはまちがえちゃうものだから。これからできるようになっていけばいいんだよ」と言つて、だから、全然いつでも頼つてね。と笑つてくれた。思わず泣いてしまいそうで、マスクの下でずっと唇をかみしめていた。口を開けば涙が出そうで、何も言えずに頭を下げた。それから約二週間、先生は自主練習のとき、自分の指揮の練習もあるだろうに、私の自主練習につき合ってくれた。けれど、そう上手くはいかなくて、先生が指揮を振っているとき、代わりに私のことをサポートしてくれていたもう一人の先生が、その日、合奏練習の

日に休みだった。

簡潔に言うとは結果は散々。ここだと思って入ったところがまちがっていた。まちがえて曲を、先輩方の演奏を駄目にするくらいなら入らない方がよかった。先生は「どうどうと入ってこれてすごいね、成長したね」なんて言ってくれたけれど、あまり素直に受け入れることができなかった。その日からは練習をする気力も無くなってきた、部活帰りに大泣きしたり、支えてくれた先生に対して「辞めたいです」なんて言ってしまったり、でもその度に先生、先輩、同じパートの子たちがはげましてくれた。「このコンクールには、あなたの存在が不可欠。」「一年生でお手伝いに選ばれるなんてすごいことだよ。胸張って。」「分らないことはサポートするから。」「手伝えることなら手伝うから何でも言ってみて。」ピアノを習っている友達、担任の先生、家族までも。本当にいろいろな温かい言葉をくれて、傍で支えて、時には遠くから見守っていてくれて。

コンクール本番。初めてのコンクール、初めての外での演奏、初めてのことが多く緊張していた私に、先輩がおかしをくれた。「ファイト」とメッセージの最後に英語で書いてあって、うれしくて仕方がなかった。それから本番になると不思議と緊張しなくなつて、むしろ楽しい、という気持ちの方が勝っていた気がする。終わって舞台袖に行くと、打楽器を運ぶお手伝いとしてきていた友達が一番に褒めてくれて、そこから先輩も走ってきてくれて、帰るとき、先生方からお褒めの言葉をいただいて、個人的にはやりきったという感情でいっぱい、正直、賞は獲れても獲れなくてもよかったが、「これで最後か。」なんて言う先輩方を見て考えが変わった。

ただけとするならば、金賞。そして次の県大会へ。これを最後にさせたくない。まだ一緒に吹いて演奏したい…。そう祈りながら結果発表。

結果は金賞。先輩方と泣き合ったり、ハイタッチをしたり、笑い合ったり、幸せで、でも私ひとりの力で得られたものではないので、

先生方、先輩、同級生のみんな、見守ってくれた家族。みんなにお礼を伝えた。

あんなにも明るい気持ちで本番に臨むことができたのは、間違いない支えてくれた皆のおかげです。この場を借りて言います。本当に不甲斐ない私ですが、根気強くご指導、ご助言をいただき、ありがとうございました。

仲間や家族、近くで支えてくれている人たちだけでなく、遠くから見守ってくれたり、間接的にも関わってくれたりした全ての方に、心から感謝を。そして、大切さ、ありがたさを忘れず、これからも日々精進していきます。